

長崎大で始まった寺島実郎氏（日本総合研究所理事長）監修のリレー講座「世界の構造転換と日本の進路」（同大主催、長崎新聞社共催）の講師陣に講座の寄稿を受け紹介する。講座は12月までに全6回開催。第1回は9月30日にあった寺島氏の「2010年、世界の構造転換と日本の立ち位置」。

2010年、世界の構造転換と日本の立ち位置

長崎大リレー講座 寄稿①

日本総合研究所理事長

寺島 実郎氏

私は、外から日本を見る機会が多いが、そこで得た実感と統計的な裏付けに基づいた世界の見方を、長崎大でのリレー講座を通して受講者の方々と共有したい。長崎とはどういう土地なのか。私は、単なる地名でなく「長崎学」という思想を含んでいると考えている。17世紀、黄金時代のオランダと日本は長崎を通じて貿易で結びついていた。19世紀にかけての世界の動きと日本の立ち位置は、オランダと長崎をキーワードにすれば実によく理解できる。ロシアのピョートル大帝

は24歳のときにアムステルダムで船大工の修行をしたが、そこで抱いた関心からロシアのアジアへの野心と東進が始まった。1804年には、4人の漂流民を送り届けるという名目でレザノフ一行が長崎を訪れている。ペリー来航の50年も前のことだ。オランダの影響は西回りでも日本に到達する。メイフラワー号でアメリカに上陸したヒルグムフアーザースは、実はオランダから大西洋を越えた。彼らの自由を求める価値観もオランダの共和制の影響を大きく受けている。世界は連関の中で動いている。

戦後の日本人は大きな見方を失い、アメリカを通じてしか世界を見なくなってきた。しかし、回国の影響力は低下している。2009年の日本の貿易総額に占める割合は13.5%にまで低下し、10%を割るという現実も視界に入っている。一方で中国との貿易は09年に初めて2割を超えた。香港、台湾、シンガポールを加えた「大中華圏」でみると30.7%に達する。中国と台湾は政治的には対立しているが経済の結びつきは密接だ。香港・マカオには中国本土から2千万人ももの観光流入がある。工場も資源もないシン

ガポールは、目に見えない財の創出で世界に冠たる経済国家に発展した。「大中華圏」は、その相関のダイナミズムでネットワーク型の発展・拡大を遂げている。今や冷戦期の地政学的な視点ではなく、ネットワーク的な視点で世界をとらえることが重要である。日本はアメリカとの関係を固めながら、アジアやユーラシアとの関係を重層的に構築しなければならぬ。極めて厄介な隣人である中国、迷走する友人アメリカ、競争力も見落とせない存在だ。日本には途方もない知識が要る。こうした課題をどう克服し、日本を創成するか。リレー講座の中で明らかにしたい。

ネットワーク的視点が重要